2+2の迷宮

セーラームーンＲＰＧ　番外編Ｉ

２＋２の迷宮

深森薫

「んー。結構、厄介な仕掛けねぇ」
宝箱を調べていたヴィーナスは、溜息混じりにそう漏らした。真っ暗な地下迷宮の底は、近くを流れる地下水脈のせいだろうか、じっとりと湿っていて、石造りの壁も床も天井も半ば以上苔に覆われている。ひんやりとして肌寒いくらいの気温だったが、ランタンと魔法の明かりだけを頼りに神経を張りつめて作業をしていた彼女の額には、微かに汗が浮いていた。
「厄介って、どういう風に？」
マーズが説明を求める。魔法使いが本業の彼女は『解錠（アンロック）』の呪文は使えても、鍵そのものや罠に関してはほとんど素人といってよい。
「まず罠が仕掛けてあるのは確か。それも結構大仕掛けなやつだと思う。ほら、この宝箱、床にくっついてるでしょ。うっかり開けたら……そうね、パターンとしては、釣り天井がばったーん、とか、両側の壁がごんごん寄ってくるとか、そういうの」
「……爽やかな笑顔でエグいこと言うなぁ」
思わず想像してしまったらしく、言いつつジュピターは眉をひそめた。
「それはまずいわね」
マーキュリーも心配げな表情で呟く。
「潰れた肉が混じって誰の死体かわからなくなったりしたら、『蘇生』の魔法でも生き返ることができるかどうか」
「だからそーいうエグい話はやめなさいって。……で、どうなのヴィー、解除できるの？」

マーズが視線を盗賊の方に振ると、ヴィーナスは人差し指をびしっ！　と立てて胸を張った。
「だぁい丈夫、このヴィーナス様に任せなさいっっつ！折角のお宝目の前にして、舌巻いて逃げ出すような真似ができるもんですかっ！」
「……逃げるときに巻くのは尻尾だよ……」
「あ、でも念のために逃げ道だけは確保しとかないとねっ！」
ジュピターのツッコミを聞き流し、ヴィーナスは辺りの壁を丁寧に調べはじめた。一辺が大人四、五人が手を広げて並んだほどの広さの部屋で、手練れの盗賊は先刻自分達が入ってきた正面の扉の他に、迷宮のさらに奥へと通じる小さな隠し扉を二枚、宝箱を挟んで左右に一枚ずつ見つけた。仲間たちがもの珍しげに見つめる中を、ヴィーナスは次々と手際よく扉に楔を打ち込み錠前に詰め物を施す。
「……さて。じゃあ、もし何かあったら、みんな適当にそのへんの出口から逃げてね」
一連の作業を終えたヴィーナスは軽く髪をかき上げた。自慢のプラチナ・ブロンドが魔法の光を受けて輝く。語り口は相変わらず軽い調子だったが、表情はいつになく真剣である。
やがて彼女はおもむろに商売道具を取り出した。鏡と、細い針金。針金の頭は軽く反り返り、二つに分かれて先端が鋭く尖っている。ヴィーナスはこれを鍵穴に差し込み、鏡で覗きながら指先を慎重に動かした。わざわざ鏡を使うのは、鍵穴に直接顔を近づけることを避けるためだ。これを怠ったために片目を潰してしまった盗賊を、彼女は何人も知っている。
「マーズ、もうちょい明かり近づけて」
額から玉を結んで流れ落ちる汗を拭う間も惜しんで、大きなブルーの瞳は鏡を見つめ続ける。その

様子を誰もが固唾を飲んで見守っている。地中深く埋もれた迷宮の底に音をたてるものは無く、鍵穴を探る微かな金属音だけが石の部屋に反響してひどく耳障りに感じられた。

不意に、カチッ、という音が一際大きく響く。

「やっ……！」

半ば悲鳴のようなヴィーナスの声がした次の瞬間、岩がぶつかるような鈍い音が頭上で聞こえた。

＊

ジュピターは、跳んだ。

ヴィーナスがしくじったというのは、後になってわかったこと。彼女の甲高い声が聞こえた次の瞬間、全身に鳥肌が立つような嫌な気配を感じて体が勝手に動いていた。ただの直感だが、実際これのおかげでジュピターは今日までこうして生きていられた訳である。きょとんとその場に立ち尽くしていたマーキュリーを抱きかかえ――というよりほとんど体当たりのようにして、横の通路にとび込む。文字どおり飛んで、派手に落ちた。肩から落ちて、金属鎧が石の床に激しくぶつかる音が耳をつんざく。それとほぼ同時、地響きがして背後を巨大な塊が塞いだ。

天井からぱらぱらと降ってくる小石や砂が落ち着いて、再び辺りが静かになると、ジュピターは固く閉じていた目をそっと開いた。何度かぱちぱちと瞬きをしてみるが、目を開けても閉じても何も変わらない。周りが完全な闇だからだ。とりあえず大きな息を一つついて気を落ち着かせる。それから、

「……マーキュリー」
きつく抱き締めていた両腕を少し緩めながら、囁くようにその名を呼ぶ。
「マーキュリー、大丈夫？」
「……ええ、私は。ジュピターこそ、怪我は？」
何とかね、と苦笑するジュピターの腕から抜け出して、マーキュリーは魔法の明かりを灯した。淡い光に照らし出される互いの姿に二人はほっと安堵の溜息を漏らす。
今二人が居るのは、隠し扉の裏の細い通路の中である。背後は巨大な石に遮られた行き止まり。前方は、どこまで続くとも知れない深い闇――もしかしたら、何処にも続いていないのかも知れない。壁や床の石はやはり苔に覆われ、空気はひんやりと湿っていた。
「さて。完全に閉じ込められちゃったみたいだね」
きょろきょろと辺りを見回しながら、ジュピター。
「そうね」
マーキュリーの表情は冴えない。
もっとも、この状況できゃぴきゃぴと陽気にはしゃげる人間がいるとも思えないが。
「……マーズと、ヴィーナスは、どうしたかしら」
「分からないな。ただ、向こう側にも出口があったから、たぶん、そっちから逃げてるだろうね」
ジュピターの答えも歯切れは悪かったが、最悪の事態を考えればきりがない。縋るようなマーキュリーの瞳を見つめ返し、ジュピターは大丈夫だよと努めて明るく答えることにした。

＊

「やっ……！」

短い悲鳴を上げるほんの一瞬。

ありとあらゆる思考がヴィーナスの脳裏を交錯したが、そのどれよりもまず先に彼女を突き動かしたのは動物的直感だった。体を返して立ち上がり、猫のようにしなやかな身のこなしで飛び退る。それから魔法の松明を手にしたままその場に立ち尽くしていたマーズに、タックルをかけるように思いきり突き当たって自分も一緒に抜け穴に転がり込んだ。自分が石の地面に伏すのとほぼ同時、すさまじい震動と轟音が腑まで揺さぶるのが感じられた。

ヴィーナスの周囲は、完全に闇に包まれていた。冷たい漆黒の他には何も――自分の姿すらも見えない。

「い痛つつつ……」

転がるときに一応受け身を取ったのだが、固い石の上ではやはり多少は痛い。

と、すぐにその声に答えるように、魔法の明かりがぽぅと辺りを照らし出す。石造りの陰鬱な狭い通路。巨石で塞がれた入口。そして、マーズのむっとした表情。

「あ。マーズ、大丈夫？」

「大丈夫じゃないわよ、思いっきり頭ぶっつけたわ。何が『このヴィーナス様に任せなさいっ』よ、

思いっきり失敗じゃない」
低い声でマーズは答えた。ヴィーナスは軽く肩をすくめ、ぺろりと舌を出す。実際罠の解除に失敗したのは彼女の落ち度なのだから、こういう時は変にフォローされるよりも正面切って非難される方がかえって気が楽になる。
「……でも、まあ、釣り天井の下敷きよりはマシね。命拾いしたわ」
いつもはさらさらと流れる黒髪も、岩窟内の水分を集めて頬や首にまとわりついている。その髪を鬱陶しげにかき上げながら、マーズは遠回しに感謝の意を表した。
「……マーズ……」
「何？」
「二人っきりに、なっちゃったわね」
お約束のヴィーナスの台詞に、しかしマーズは、
「……そうね」
とだけ答え、それ以上は何も言わなかった。

「さて。すっかり閉じ込められちゃったけど」
ヴィーナスは釣り天井の巨石に塞がれた入口を調べるが、特に芳しい結果は得られない。
「これから、どうしよっか」
「そうね……」

マーズは通路の先の暗闇をじっと見つめている。自分達以外に動くものの気配はない。辺りに働いている精霊の力も特におかしなことはない。ただ、不安と恐怖を司る精神の精霊の働きが、少し強くなっていることを除けば。

「……どうしたの？」

ヴィーナスが何かに気付いたように聞き耳を立てた。

「何か、聞こえない？」

天を仰いでじっと目を閉じ、聴覚に意識を集中する。その仕草は、本当に猫のようである。やがて彼女は、横の壁にそっと耳を押し当てた。

金属音――剣のようなもので石を打ちつけるような音。カンカンカン、と三度打ちつけて止まり、再びカンカンカン、と三度。

「合図だわ。たぶん、ジュピターたちの」

言われてマーズもすぐに壁に耳を当てる。

「あ。止まった」

「んじゃ、こっちからもお返事しとこ」

ヴィーナスは自分の短剣を取り出し、壁を打った。向こうと同じく、カンカンカン、と三度叩いては止める。お互い言葉にはしないが、先刻までの重苦しさが少しだけ和らいだような気がしていた。

＊

「向こうも、何とか無事みたいだね」
壁越しの呼びかけに返ってきた応えを、ジュピターとマーキュリーは岩に貼り付くようにして聞いた。
「さて。それで、これからどうしようか。だいたい、今外が昼なのか夜なのか、分かる方法って無いのかな。ずっと穴の中だからもうさっぱり――」
ぐるるるるるるるきゅうぅぅ
ジュピターの声よりも豪快に、腹の虫が鳴いた。
「そうね。たぶん夕飯時ね、きっと」
マーキュリーも思わず笑みをこぼす。
「うあ……えーと……」
「あ、でも、私達がここに入ってから随分経ってるのは確かよ」
頬をぽりぽりと掻いてばつが悪そうなジュピターに、彼女はフォローするように言った。
「やっぱりここで休んで行くのがいいと思うわ。この通路はまだ奥まで続いてるみたいだけど、どんなモンスターや罠があるとも知れないし、他に休める場所があるとは限らないもの。……それに、休んでるうちにあの天井が元に戻る可能性もあるから」
古代の迷宮は、昔の賢者達が自分の実力を後世にまで誇示するために作られたものが多い。そのため、できるだけ多くの人間を迎え入れることができるよう、罠も一度発動した後でも時間が経つとま

た元に戻る仕掛けが施されていることが多い。もっとも、どのくらいの時間で元に戻るのかは罠の構造にもよるが。

「そうか。じゃあ、今夜はここでキャンプだね」

言うと早速、ジュピターは身につけていた板金鎧の留め具を外しはじめた。鎧を身につけたまま眠ると、重さに加えて冷えた金属が体温を奪うことで体に負担をかける。ある程度安全なことが分かっていれば、脱いだ方がいいのだ。

それから二人差し向かいになり、簡単な食事をとる。携帯食のメニューはチーズにビスケット、一口の葡萄酒。いつこの遺跡を脱出できるか知れない状況で、空腹を完全に満たすことはできないが、それでも何かを口に入れるというのは人の心と体に癒しの効果をもたらすようである。

「さて……それじゃあ」

葡萄酒の水袋に栓をしながら、ジュピターは連れの神官に視線を振った。それを受けて頷く彼女。

「休みましょうか。起きててもしょうがないし」

「いつもと同じでいいね？」

そう言ってジュピターは、マントを羽織り壁にもたれて座った。その膝の間にマーキュリーが座る。それから二人はぴったりと寄り添って――マーキュリーはジュピターに背中を預け、ジュピターは彼女の体を抱きすくめる。こうして一枚のマントに二人でくるまり暖をとりながら朝を迎えるのが、二人で旅をしていた頃からずっと続く、野宿の時のやり方だった。

いつ抜け出せるとも知れない迷宮の底。危険と隣り合わせのこの状況においても、疲れた体は素直

に休息を欲している。互いの温もりを心地よく感じながら、二人はいつの間にか眠りに落ちていった。

＊

「さあ、マーズ！」
ヴィーナスの台詞にはいつになく力がこもっている。
「一緒に寝ましょ！」
「……嫌」
マーズの答えはこれ以上は無理なほど素気なかった。
「何でぇ？　二人っきりじゃない。そんなに恥ずかしがらなくてもいいのに♡」
「あんたこそ恥を知りなさい。マントはちゃんと二枚あるでしょう」
「でも、寒いわよ」
この迷宮は、近くを流れる地下水脈のせいかひどく湿度が高く気温が低い。どちらかと言えば軽装な彼女達には、動き回るのをやめた今、そのことが急にひしひしと感じられる。
「やっぱ、ここは二人で互いに肌を温めあって――」
「じゃ、お休み」
マーズはさっさとマントにくるまり横になった。
ヴィーナスはしばらく残念そうにマーズの背中を見つめていたが、やがて諦めて自分もマントにく

るまった。

会話が途切れ、死んだような静けさが辺りを支配する。

……くしゅん！

その静寂はくしゃみ一つで破られた。

……くしゅん！

また一つ。

「……ねえ、マーズ……」

「ぁによ」

「やっぱ、寒いんじゃない」

「別に、寒くなんかなっ……くしゅん！」

ヴィーナスはごそごそと起き出すと、マーズの方を覗き込んだ。

「ほぉら。やっぱり寒いんじゃない。風邪ひくわよ？」

「……るさいわね、放っといて……っ！」

体の震えがマーズの言葉を遮った。湿った石畳は、分厚いマント越しにも容赦なく体温を奪っていく。

「だってぇ、こんな所で風邪なんか引いて動けなくなったらお手上げよ。あたし、マーキュリーみたいに『施療（キュア・ディジーズ）』の魔法なんて使えないし、ジュピターみたいにマーズのことずっと担いで行くな

んてこともできないんだからね」
ヴィーナスの言うとおりである。言動は至って不真面目に見えるが、彼女の状況判断は冷静且つ的確であることが多い。
ここは、マーズが折れるしかないようだ。
「……あぁ、もう分かったわよ！　一緒に寝りゃいいんでしょ、一緒に！」
「そうそう、そういうこと?」
言うが早いかヴィーナスは表情がぱっと輝かせ、自分のマントを引きずってマーズの隣りに滑り込んだ。
「じゃ、おっ邪魔しまーす♡」
そっぽを向くマーズの背中に、そう言ってぴったりと寄り添うヴィーナス。
「……おかしな真似したらぶち殺すからね」
マーズの言葉に、ヴィーナスは答えなかった。かわりに静かな寝息が規則正しいリズムを刻むのが聞こえてくる。考えてみれば、昼前にこの迷宮にもぐり込んでからここにたどり着くまで、彼女はずっと先頭を歩いて罠や抜け道の発見に神経を尖らせていたのだ。その疲労は相当なものの筈である。
二人分の体温を、二枚のマントはよく保ってくれた。背中に寄り添うヴィーナスの肌の温もりを不本意にも心地よく感じながら、マーズもまた静かに眠りについた。

＊

石の回廊は、一本道で遺跡の奥へと向かっていた。釣り天井の下敷きになってしまったカンテラの代わりに魔法の明かりをショート・ソードに灯して、ジュピターが前を、その後をマーキュリーが歩く。結局ひと休みしたくらいでは釣り天井の巨石は元には戻らなかったのだ。二人は辺りの様子に警戒しながらゆっくり、慎重に歩を進めたが、四人で進んできた罠だらけの通路とはうって変わって、拍子抜けするほど何事もなく済んでいた。

やがて道は一枚の扉に行き当たる。

「あっ、待って……！」

マーキュリーが引き止めるより先に、ジュピターはさっさと扉に手をかけ、ぐいと押し開けた。幸いなことに罠はおろか鍵すらも掛かっていない。中は広い部屋になっているが、廊下と違って苔が少しも生えておらず、この遺跡が作られた当時の面影を残しているようだった。そして。

この部屋には、主がいた。

ライオンの体に、鷲の翼、人間の、若い男のような顔。

「スフィンクスだわ」

マーキュリーの知識は、そんな姿をした幻獣の名前を記憶にとどめていた。

「遺跡や地下迷宮で宝物を守る番人よ。罠も鍵も必要ないわけね」

「……戦う？」

訊きながらジュピターは剣の柄に手をかけた。

「いえ、その必要はないと思うわ。スフィンクスの出す質問に答えれば、すんなり通してくれる筈よ」
『汝は何者ぞ』
二人の姿を認め、スフィンクスはそう告げた。――告げた、といってもジュピターの耳には巨大な獣の唸り声にしか聞こえなかったが。
スフィンクスが発したのは、下位古代語である。
『……古の英知を求め、この地に足を踏み入れし者なり。今再び地上に戻る術を求め、彷徨の果てに此処にあり』
マーキュリーがすかさず答えた。これも流暢な古代語である。
『知識の神の司祭よ、汝の最も欲するものは何ぞ』
その応答の見事さに機嫌をよくしてか、スフィンクスは彼女に敬意を表しつつ言葉を続けた。
『いまひとたびの地上の光』
『ならば、先ず我が謎に答えよ』
スフィンクスはジュピターの方を向き直った。
『では、汝に問う』
「うあっ？　ねえ……何て言ってんの？」
いきなり話を振られて戸惑うジュピター。彼女に古代語は分からない。
「なぞなぞに答えられたらここから出してくれるって」

マーキュリーは先刻のやりとりをごく簡潔に翻訳した。
その間に、スフィンクスは何やら呪文を唱える。上位古代語の詠唱が終わると、彼――スフィンクスに雌雄の別があるかどうかは不明だが――の前に短剣の山が現れた。
『此処に、六本の短剣がある。これを用いて、完全なる三角形を四個作るにはどうすればよいか』
ジュピターはどっかと座り込んで、短剣をがちゃがちゃといじりはじめた。戦士である彼女は武器の扱いには慣れているが、こんな使い方は初めてである。ああでもない、こうでもないとしばらく悩んでいたが、
「棒が六本で、三角、ね……あ」
ふと何かを思いついたように呟いた。
「ねえ、これって、立ててもいいのかな」
小さく首を縦に振るスフィンクス。彼の方は、ジュピターの喋る共通語を理解しているようである。
「テントの形にすればいいんじゃん。ほら」
そう言ってジュピターは短剣を正四面体に組み上げた。
『うむ、正解だ』
スフィンクスは鷹揚に頷いてそう言った。ほっと胸をなで下ろすジュピター。
『では、汝の番だ、知識の神の司祭よ』
続いてスフィンクスはマーキュリーに語りかける。
『我が謎に答えよ。「朝には四本足、昼には二本足、夕べには三本足」此は何ぞや』

『其は人間なり』
即答するマーキュリー。
『其のこころは何とする』
『四本足は赤子、二本足は壮年、三本足は老年。朝に生まれ夕べに死す、儚きことの例えなり』
『うむ！』
スフィンクスは大きく頷いて立ち上がった。広げた翼が大きな体をいっそう巨大に見せ、逞しい脚には鋭い爪が幾つも並んでいる。改めてよく見れば、いかにも恐ろしげな怪物だ。
『見事であった。久々に楽しい思いをしたぞ。この扉の向こうは外の世界に続いている』
スフィンクスはそう言って、自分の背後の扉を指した。
『行くがよい。縁あればまた逢おう』

*

「げえっ！　あの化け物なぁに？」
扉を開けたヴィーナスは、はじめてみる幻獣の姿に思わず頓狂な声を上げた。
「スフィンクスね。通りすがりの人間に訳のわかんないなぞなぞをふっかけて面白がる、厄介な奴よ」
「なぞなぞぉ？　なんかネクラい奴ねぇ」

「全部聞こえておるぞ」
むっとしてツッコミを入れるスフィンクス。
「何だ、喋れるんじゃん」
怖いものを知らないヴィーナスの言葉と口調に、また幻獣は気分を害したようだ。
「当然だ。吾輩は数百年の時を生きておるのだ、お前達蛮族の話す言葉も心得ている」
『その必要はないわ』
と、流暢な古代語で、腹立たしげにマーズが言った。
『そんな気なんて遣って貰わなくて結構よ、私だって魔法の生み出したケダモノの言葉くらい心得てるわ。いいからとっとと質問しなさい』
二人が二人とも礼儀をわきまえぬ侵入者に、スフィンクスは怒り心頭に達しているようだが、額の青筋をぴくつかせながらもなんとか冷静さを装って言葉を続けた。
『……ならば、答えよ。此処に、六本の短剣がある。これを用いて、完全なる三角形を四個作るにはどうすればよいか』
とりあえず与えられた短剣を並べてみるマーズ。
三角形四個をつくるには、あと三本は剣が必要である。
「ヴィーナス、貴女のダガー貸して……と、あと一本ね」
マーズはおもむろに呪文を唱えはじめた。スフィンクスに話しかけたときの言葉に似て非なる響きのそれは、上位古代語と呼ばれるものである。

「……『物体召喚（アポート）』」

力あることばの解放とともに、彼女の掌に影が現れる。影はやがて色を得て、一本の短剣の形を取った。それにヴィーナスのダガーと自分の腰に提げていた短剣、合わせて三本の短剣を加えて四つの正三角形を完成させた。

『できたわよ、正三角形四つ』

『……駄目だ。そんなものは認められぬ』

憮然とするスフィンクス。

『何故？　何か文句があるっていうの？』

『当たり前だ。誰が自分の短剣を使って良いと言った』

『使っちゃいけない、とも言わなかったわ』

マーズは引き下がらない。

『あなたは「この短剣を使って」と言っただけよ。「この短剣だけを」とも、「他の剣を使うな」とも言わなかったわ。それともなぁに、後になってそうやってぐちゃぐちゃ文句を言うのがあなた達のやり方なわけ？』

『むう……』

『なにか言いたいことがある？』

『……仕方ない。次は、汝の番だ』

スフィンクスは悔しさのあまりか歯ぎしりしながらヴィーナスに向き直った。

「あ、っと……あたし、共通語でないとわかんない」
ぱたぱたと手を振るヴィーナス。スフィンクスはうむ、と短く言って、共通語で話し始めた。
「では、参る。『朝には四本足、昼には二本足、夕べには三本足』。此は何ぞ」
「はぁ？」
朝は四本足、昼は二本足、夕方は三本足。あまりに荒唐無稽な描写に、ヴィーナスは言葉を失った。
「答えられぬか？　ならば――」
「わかった！」
慌ててヴィーナスはそう宣言した。
今さら分からない、とはもう言えない。
「それは……えっと、そう、ポッポブブカ虫よ！」
「……なんじゃそれは」
顔をしかめるスフィンクスに、ヴィーナスは人差し指をぴっと立ててしたり顔で語りはじめた。
「嫌ぁだ、知らないの？　あたしの記憶が正しければ、北海のポッポ島だけにしかいない珍しい虫よ。朝は四本足、昼は二本足、夕方には三本足。で、確か夜中は一本足で、明け方には一気に六本足になるんだったわね」
「そんな虫がいるか！　いい加減なことを言うな！」
「あに言ってんのよ、あんたが今いるっつったんじゃない。朝は四本足で、昼は二本足で、夕方には三本足になる生き物がいるって、その口が言ったわよ！」

「そんな虫がいてたまるものか！　ポッポブカブカなど聞いたこともないぞ！」
「ポッポブブカだってば。そんなこと言って、本当は知らないんでしょう？　そんなんでよくこんな迷宮の番を任されたわね。何百年生きてるのか知らないけど、歳ばっかくってもこんなとこに閉じこもってちゃだぁめね、世間知らずさん。ちゃんちゃらおかしいったら！」
「なっ、何だと！　おのれ、言わせておけば――」
ばさっ、と翼を広げ威嚇するスフィンクス。
「おっと、なあに、知恵じゃかなわないからって今度は力ずくなの？　へーぇ、面白いじゃない、やってご覧なさいよ。みんなに言いふらしちゃうんだから。『スフィンクスは蛮族に知恵比べでやりこめられて、やけくそ起こしてとうとう暴れだした』ってね！」
「ぐっ……ぐはぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっつ！」
怒りの表情で悲痛な悲鳴を上げたスフィンクスは。
地面に伏して、そのまま動かなくなった。

＊

「……どうしたの？」
突然立ち止まり後ろを振り返ったジュピターの様子に、マーキュリーは急に不安を覚えて訊ねた。
「何か、追いかけて来る」

ばたばたという足音。それは次第に、はっきりと聞き取れる音になっていった。続いて真っ暗な通路の奥に小さな明かりが現れ、足音が近くなるにつれ光も大きくなってゆく。光はやがて、足音の主の姿をぼんやりと浮かび上がらせはじめた。
「マーズ！　ヴィーナス！」
「良かった！　無事だった――」
「おかげさまでね！　いいからほら、逃げるわよ！」
猛ダッシュで駆けてきたマーズは、再会を喜ぶどころか立ち止まりもせず、マーキュリーの手を引いて走った。
「どうしたんだよ、ヴィー！」
「はぁい♡　ジュピター、丁度良かった。これ持って！」
ヴィーナスは抱えていた荷物をジュピターの手に預けると、やはり立ち止まりもせず駆け抜けていった。
ヴィーナスから受け取ったのは、やたらと重い箱である。
「ちょっ、何だよ、これ」
「お宝に決まってるでしょ！」
「お宝って⁉」
ジュピターも皆を追って走り出す。
「スフィンクスのお宝！あいつが正気に戻って取り返しにくる前ににげるの！」

「あのう、マーズ、一体どういう」
「話は後！　とりあえずスフィンクスが追いかけてこないところまで逃げるの！」
長い坂道を駆け上がる四人の前に、白い光が見えてきた。遺跡の出口、二日ぶりの地上の光だった。

――２＋２の迷宮・終

２＋２の迷宮

セーラームーンRPG　番外編Ｉ　　２＋２の迷宮
著　深森薫
表紙・イラスト　飛鳥圭

1999年 7月　　初版発行
2023年 4月　　PDF化にあたり加筆修正

発行者　　Bitter ＆ Sweet （深森薫）
http://mimorikaworu.yomibitoshirazu.com/